

生きるすべ

1. カケス

打吹山の東斜面や長谷寺周辺で出会う鳥です。繁殖は県境に近い山地ですが、冬になると平地へ降りてきます。キジバトくらいの大きさのカラスの仲間で、きれいな色彩を散りばめています。カラスに似ているところは声の悪さです。ギャーギャーと大げさな鳴き声で存在がわかります。

高木の茂みの中において、移動するときは翼を広げて樹冠の上をふわふわとまっすぐ飛びます。このとき目立つのが、腰と翼の真ん中後縁の白色です。倉吉ではガストリとよんでいたようで、カシの樹のドングリを食べるカシドリが誂(なま)ったのかもしれませんが。

貯食することで知られており、ドングリを地面に埋めるといわれていますが、現場に遭遇したことは一度しかありません。10月の下旬、倒木の朽ちたところにくわえてきたドングリを埋めました。後で掘り出して食べるとのことですが、その状況は見いていません。高山にいるホシガラスもハイマツの実を隠します。こちらは、岩に生えたコケの下に実が2個あるのを見つけたことがあります。後で食べるためには場所を記憶しなければ役立ちませんので、カラスの知能が発達していることと関係ありそうです。



カケス

2. 長寿木

打吹山にはシイの大木が見られますが、これらの年齢はいくつでしょうか。木の寿命がわかると、その木がいつからそこに生育しているのかわかります。逆にその土地の成立時期が判明すれば、木の年齢を推測することができます。屋久島のスギは長寿として有名ですが、7300年前に近くの火山の大噴火で喜界カルデラが生じた際、屋久島はすべての植生が失われたと考えられています。したがって、現在の植物はその後侵入したものであり、縄文杉はもっと若く2500年といわれています。

2016年、成徳小学校の校庭の上斜面にあったタブノキが伐採されました。切り株をみると直径は約1m、年輪は約116でした。打吹公園が作られたのが114年前ですから、その時生えたものと考えられます。その場所は、嘉仁(よしひと)皇太子(後の大正天皇)が行幸されたときに成徳小学校児童の花運動をご覧になったあずまやと校庭との間ですから、大きな木は存在しなかったはずですが、歴史の出来事とも整合しています。

打吹山のシイは、300~400年程度と考えられます。1615年の一国一城令で城が取り壊されるまでは、攻めてくる敵の動きを見るために見通しの悪い森ではなかったはずですが。その後は「お留山」として伐採が禁じられ、自然のままとなりました。江戸時代の絵図にはアカマツと見られる樹形が描かれていますから、陽樹から陰樹への変化を物語っています。



約 116 才のタブノキの切り株